

活動報告

COVID-19 禍における母性看護学実習の 代替実習の有用性と課題

The Usefulness and Future of Alternative Practice for Maternal- Newborn Nursing Practicum Under COVID-19 Pandemic

中田 覚子 櫻井 綾香 湯本 敦子 竹内 良美

Satoko Nakata, Ayaka Sakurai, Atsuko Yumoto, Yoshimi Takeuchi

キーワード：母性看護学実習，代替実習，COVID-19 禍

Key words : Maternal-newborn nursing practicum, Alternative practice, COVID-19 pandemic

要旨

COVID-19感染拡大の影響により、2020年度佐久大学看護学部母性看護学実習は実習内容の変更をせざるを得ない状況となった。様々な制限がかかる状況下においても、学生の学びを深める手助けとなる実習内容および臨地実習に近い学びができる学内実習内容を担当教員で検討し、実施した。この代替実習内容の有用性を学生アンケート結果より評価した結果、すべての実習内容が95%以上の学生にとって学びを深める手助けとなっていた。特に、学内実習において、模擬カルテからの情報収集、周産期看護を専門とする教員による模擬妊婦および模擬褥婦、助産師としての臨床経験がある教員による模擬助産師および模擬臨床指導者は、臨地実習に近い実習環境を提供する一助となった。今後の課題として、分娩実習におけるリアリティのある学修環境の提供が必要であることが示唆された。

I. 緒言

2019年末からのCOVID-19の世界的大流行は、本学が所在する長野県においても猛威を振り、本学の実習施設が所在する圏域における“新型コロナウイルス特別警報”の発出(新型コロナウイルス感染症長野県対策本部, 2020; 2021a)、長野県全圏域における“医療非常事態宣言”の発出(新型コロナウイルス感

染症長野県対策本部, 2021b)がなされる事態となった。また、2020年4月の緊急事態宣言(内閣官房, 2020)以降、長野県内の産科診療においては、妊婦健康診査の家族付き添い中止、夫立ち会い分娩の中止、家族の面会禁止、里帰り分娩の受け入れ中止等、多くの制約が課されることとなった。このような状況を受け、本学の2020年度母性看護学実習は、実習方法および実習内容を再検討し、変更せざ

受付日2021年9月28日 受理日2021年11月19日

佐久大学看護学部・別科助産専攻 Saku University Faculty of Nursing and Midwifery Program

るを得ない状況となった。

本稿では、COVID-19感染拡大に伴う本学の母性看護学実習の代替実習内容を報告するとともに、学生アンケート結果から代替実習内容の有用性と課題を報告する。

II. 代替実習内容の決定

COVID-19感染拡大状況および産科診療の状況を踏まえ、担当教員で協議した結果、臨地における看護学生の外来実習および分娩実

習は困難であると判断し、学内実習へ切り替えることを決定した。また、例年の臨地実習方法では実習施設における学生の3密を防ぐことは困難であると判断し、褥婦および新生児の受け持ち実習が臨地において可能な場合においても、各実習施設における1日あたりの学生人数を削減することを決定した。加えて、大学構内の学生の3密を防ぐことを目的に、本学の実習調整等を行う実習部会において、学内実習における実習室利用可能日が、各領域あたり週2日程度(半日)と決定された。

表1-1 COVID-19禍における母性看護学実習の代替内容

	従来の実習内容	COVID-19禍における実習内容
シミュレーション演習	<p>学内実習で以下の内容を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 小グループに分かれ、以下の2場面において褥婦および新生児より情報収集すべき項目や情報収集方法を整理する。 《場面1》産褥1日目の褥婦の検温場面 《場面2》産褥2日目の褥婦の授乳場面 2. グループの代表者が実演をし、デブリーフィング(振り返り)を行う。実演とデブリーフィングを繰り返し、より良い情報収集方法・褥婦および新生児との関わり方を検討する。 	<p>従来の実習内容においても学内実習であるため、感染予防対策(不織布のマスク着用、手指消毒、備品の消毒、実習室の窓および扉の開放による常時換気)を実施しながら、実習内容は変更せずに行う。</p>
外来実習	<p>臨地実習で以下の内容を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 妊婦健康診査を見学する。また、腹囲・子宮底長の測定、レオポルド触診法、NST装着、胎児心拍聴取等は、指導者の援助を受けながら一部実施する。 2. 見学した妊婦健康診査事例を、①妊婦の健康状態、②妊婦の心理状態、③胎児の発育状況・胎児付属物の状態の視点でアセスメントする。 3. 保健指導の見学を通して、看護者の姿勢(保健指導をする際の工夫・配慮)を考察する。 	<p>学内実習で以下の内容を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 助産師外来を想定した模擬妊婦健康診査を見学する。 2. 見学した模擬妊婦健康診査事例を、①妊婦の健康状態、②妊婦の心理状態、③胎児の発育状況・胎児付属物の状態の視点でアセスメントする。 3. 模擬妊婦健康診査の見学を通じて、看護者の姿勢を考察する。 <p>《学内実習を臨地実習に近づけるための工夫》</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 模擬妊婦は周産期看護を専門とする教員が実施する。なお、模擬妊婦は、素肌に見立てるための肌着を洋服内に着用するとともに、バスタオルおよび胎児人形を用いて腹部増大を再現する。 2. 模擬助産師は助産師としての臨床経験5年以上かつ妊婦健康診査の実務経験のある教員が実施する。 3. 尿検査場面として、採尿カップおよびテストテープ画像を印刷したものを準備する。 4. 腹囲・子宮底の測定およびレオポルド触診法実施時は、洋服の上からではなく、素肌に見立てた肌着の上から実施する。ただし、学生に示す測定値は事前に設定した値とする。 5. 超音波検査場面では、超音波画像を映す。 6. 胎児心拍聴取場面では、胎児心拍音を流す。 7. 腰痛への保健指導として骨盤ベルトを準備し、実際に装着方法を説明する。

このような制限のかかる状況下においても、学生の学びを深める手助けとなる実習内容および臨地実習に近い学びができる学内実習内容を担当教員で検討し、以下の代替実習内容を再立案した(表1-1、表1-2)。

Ⅲ. 代替実習内容の有用性の検証方法

1. データ収集方法

各実習グループの母性看護学実習最終日に、口頭にて本調査の目的を説明し、クラウド型

表1-2 COVID-19禍における母性看護学実習の代替内容

	従来の実習内容	COVID-19禍における実習内容
分娩実習	<p>臨地実習で以下の内容を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 分娩第1期～第4期のケアを、産婦のそばに付き添いながら、臨床指導者または教員とともに実施する。 2. skin-to-skin contact、母児対面、家族対面の場面の見学から、出生直後の母と子および家族の交流の意味を考える。 3. 関わらせて頂いた事例を、分娩3要素および心理的側面の視点を持ちながら経時的にアセスメントをする。 4. 受け持ち事例がない場合は、指定された事例のバルトグラム・CTGを通して学習を深める。 	<p>学内実習で以下の内容を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 分娩第1期～第4期までのDVDを視聴する。 2. 産痛緩和法(圧迫法、マッサージ法)を学生同士で実施する。 3. CTGモニターの判読を行う。 4. DVDの視聴から、夫立会い分娩やskin-to-skin contact、母児対面、家族対面の意味を考える。 5. 視聴したDVDの分娩第1期の一時点に対して、分娩3要素および心理的側面の視点を持ちながらアセスメントをする。 <p>《学内実習を臨地実習に近づけるための工夫》</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 実習室に設置されている分娩台やアクティブチェアを用いながら、産痛緩和法を実施する。
受け持ち実習	<p>臨地実習で以下の内容を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 分娩期もしくは産褥早期より母子一組を4日間受け持ち、一連の看護過程を展開する。 2. 実習期間中に対象となる褥婦・新生児がない場合は、ハイリスク妊娠で入院中の妊婦を受け持ち、一連の看護過程を展開する。 3. 保健指導の見学を通して、看護者の姿勢(保健指導をする際の工夫・配慮)を考察する。 	<p>臨地実習とするが、実習施設が実習受け入れ中止となった場合には、学内実習へ切り替える。</p> <p>《臨地実習の内容》</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 一組の褥婦・新生児を2日間受け持ち、臨床指導者・教員とともに母子の観察・ケアを行う。 2. 全体像把握のため、関連図作成およびアセスメントを行い、看護計画を立案する。 3. 保健指導の見学を通して、看護者の姿勢を考察する。 4. 後日、受け持ち実習に関する振り返り日を設定し、対象理解を深める。 <p>《学内実習の内容》</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 一組の模擬褥婦・新生児(新生児人形)を2日間受け持ち、模擬臨床指導者とともに母子の観察・ケアを行う。 2. 全体像把握のため、関連図作成およびアセスメントを行い、看護計画を立案する。 3. 受け持ち場面の振り返りを行い、看護者の姿勢を考察する。 4. 後日、受け持ち実習に関する振り返り日を設定し、対象理解を深める。 <p>《学内実習を臨地実習に近づけるための工夫》</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 模擬カルテを作成し、臨地実習に近い形で情報収集ができるようにする。 2. 模擬褥婦は周産期看護を専門とする教員が乳房モデル(高研:LM-045)を装着し実施する。子宮底の観察時は、産褥子宮触診モデル(高研:LM-055)を使用する。 3. 模擬臨床指導者は産科病棟にて学生指導経験があり、かつ、本科履修学生と接点が少ない教員が実施する。 4. オーバーテーブル上に飲食物等を置くなど臨地の病室環境を再現する。

教育支援サービス manaba におけるアンケート調査への協力を依頼した。その際、①アンケートへの協力は自由意思に基づくこと、②実習成績は母性看護学実習評価表(ループリック評価表)でのみ評価し、回答の有無や回答内容は成績評価に一切影響しないこと、③個人が特定されない形で集計し、本学紀要に公表する予定であることを説明した。また、manaba のアンケートフォーム上にも、上述の①から③を記述し、周知した。

2. 調査内容

- 1) シミュレーション演習は、あなたの学びを深める手助けとなりましたか
- 2) 外来実習は、あなたの学びを深める手助けとなりましたか
- 3) 分娩実習は、あなたの学びを深める手助けとなりましたか
- 4) 受け持ち実習は、あなたの学びを深める手助けとなりましたか

上述の4項目の回答形式は、「非常に学びを深める手助けになった(5)」「学びを深める手助けになった(4)」「どちらともいえない(3)」「学びを深める手助けにならなかった(2)」「全く学びを深める手助けにならなかった(1)」の5段階リッカート尺度とした。また、その理由の記述を依頼した。

- 5) 受け持ち実習は、学内実習と臨地実習のどちらでしたか
- 6) 母性看護学実習の満足度

回答形式は、「非常に満足(5)」「満足(4)」「どちらともいえない(3)」「不満足(2)」「非常に不満足(1)」の5段階リッカート尺度とした。また、その理由の記述も依頼した。

3. 分析方法

5段階評価の項目に関しては、構成比を算出した。また、学内実習のみとなった群と2日間の臨地実習が行えた群の得点比較として、Mann-Whitney U検定を実施した。なお、統

計分析には、IBM SPSS Statistics version.24を用いた。自由記述内容に関しては、類似する内容別に分類した。

IV. 結果

母性看護学実習履修者88名(学内実習のみ63名、2日間の臨地実習実施25名)のうち、68名より回答を得た(回答率77.2%)。このうち、学内実習のみとなった者は51名(75.0%)、2日間の臨地実習が行えた者は17名(25.0%)であった。

1. シミュレーション演習

シミュレーション演習の有用性について、「非常に学びを深める手助けになった」と回答した者は52名(76.5%)、「学びを深める手助けになった」と回答した者は16名(23.5%)であった(図1)。なお、「どちらともいえない」「学びを深める手助けにならなかった」「全く学びを深める手助けにならなかった」と回答した者はいなかった。

シミュレーション演習の有用性に対しては、「健康レベルの高い褥婦への質問の仕方や会話の運び方、関わり方のポイントを学ぶことができた($n=19$)」、「自分の行動の傾向や癖、課題を見つけることができた($n=14$)」といった肯定的な意見が得られた。一方で、「他学生の前で行うことは緊張感もあり、自分の100%を出せたかは分からない($n=2$)」といったシミュレーション演習自体に対する意見や、「子宮底・乳房は模型であったため、実際の触診とは緊張感や力のかけ具合が違う($n=1$)」といった、シミュレーション教材の限界を指摘する意見も得られた(表2)。

2. 外来実習

外来実習の有用性について、「非常に学びを深める手助けになった」と回答した者は45名(66.2%)、「学びを深める手助けになった」

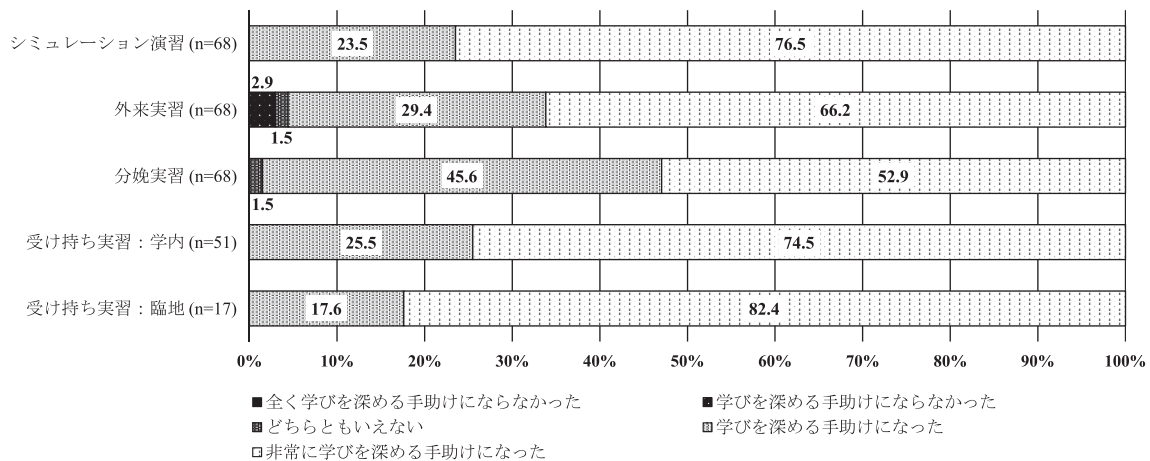


図1 各実習内容の有用性の評価

表2 シミュレーション演習の有用性に対する意見(複数回答)

理由	n
(これまで病気をもつ高齢者を対象とすることが主であったため)、健康レベルの高い褥婦への質問の仕方や会話の運び方、関わり方のポイントを学ぶことができた	19
自分の行動の傾向や癖、課題を見つけることができた	14
退行性変化、進行性変化、全身の状態、児との愛着形成などの観察の仕方、情報収集の仕方を具体的に理解出来た	4
事前にシミュレーション演習を行ったことで、受け持ち実習では、自分に余裕ができ、会話がスムーズとなり、落ち着いて関わる事ができた	3
事前にシミュレーション演習を行ったことで、受け持ち実習を行うことへの不安・緊張が軽減し、視点を広く持てた	2
実際に褥婦と関わる前に行うことで、プライバシーや安全を考慮した関わりの重要性を理解できた	2
シミュレーション演習の経験を活かし、受け持ち実習でも同じような観察の仕方、関わり方が実践出来た	2
褥婦との関わりを複数の学生で見ること、褥婦との接し方やコミュニケーションの取り方を共有できたのが良かった	2
基本的な関わり方や情報収集の仕方など学ぶことができてよかった	2
受け持ち実習前に行うことで、主観的、客観的にどうだったかを学ぶことができ、受け持ち実習の際に改善することができた	2
受け持ち実習前に、自分なりの関わり方を探すことができた	1
何を観察した方が良いのか、必要な情報はどうやって収集すればいいのかをまず始めにグループで共有したことで学びがより深まった	1
質問の仕方によって得られる反応が違うことを学べた	1
他学生の前で行うことは緊張感もあり、自分の100パーセントを出せたかは分からない	2
子宮底・乳房は模型だったため、実際の触診とは緊張感や力のかけ具合が違う	1

と回答した者は20名(29.4%)、「どちらもいえない」と回答した者は1名(1.5%)、「学びを深める手助けにならなかった」と回答した者は2名(2.9%)であった(図1)。「全く学びを深める手助けにならなかった」と回答した

者はいなかった。

外来実習の有用性に対しては、“妊婦健康診査でどのようなことを行っているのかイメージをつけることができた(n=33)”、“実際の声かけの仕方や関わり方の参考になった／

表3 外来実習の有用性に対する意見(複数回答)

理由	n
妊婦健康診査でどのようなことを行っているのかイメージをつけることができた	33
実際の声かけの仕方や関わり方の参考になった／必要な情報を会話の流れの中で収集する方法を学んだ	15
助産師役の教員と妊婦役の教員のやり取りがリアルで、実際に外来に来ているかのような雰囲気を感じ取ることができた／ビデオ学習ではなく、実際に模擬妊婦健康診査を見ることで、実際の雰囲気を感じ取ることができた	11
外来診療という限られた時間の中で妊娠週数に合わせた看護展開の速さ、難しさを実感することができた	5
実際の超音波検査画像を見たり実際の児の心拍音を聴くことで、胎児のイメージもできた	2
その人に合った保健指導の仕方、予防的な視点を持った関わり方を学ぶことができた	2
外来において看護師としてどのような点に着目することが必要か役割を学ぶことができた	2
妊婦がどのように妊婦健康診査を受診し、どのようなことに不安を頂いているのか知ることが出来た	1
妊婦・胎児の状態を判断するためにどのような知識が必要なのかを学ぶことができた	1
医師が行う外来診療と助産師が行う助産師外来との違いが良く分かった	1
解説をして頂いたことで、自分の知識や視点の不足を理解できた	1
一連の流れは理解できたが、実際はどのようなものなのかリアルなところは分からない	1

必要な情報を会話の流れの中で収集する方法を学んだ($n=15$)”、“助産師役の教員と妊婦役の教員のやり取りがリアルで、実際に外来に来ているかのような雰囲気を感じ取ることができた／ビデオ学習ではなく、実際に模擬妊婦健康診査を見ることで、実際の雰囲気を感じ取ることができた($n=11$)”といった肯定的な意見が得られた。一方で、“一連の流れは理解できたが、実際どのようなものなのかリアルなところは分からない($n=1$)”といった学内実習の限界を指摘する意見も得られた(表3)。

3. 分娩実習

分娩実習の有用性について、「非常に学びを深める手助けになった」と回答した者は36名(52.9%)、「学びを深める手助けになった」と回答した者は31名(45.6%)、「どちらともいえない」と回答した者は1名(1.5%)であった(図1)。なお、「学びを深める手助けにならなかった」「全く学びを深める手助けにならなかった」と回答した者はいなかった。

分娩実習の有用性に対しては、“分娩の様

子・流れのイメージがついた($n=25$)”、“産痛緩和を実際に体験したことにより、対象に合った力加減や、触れ方を考えることが必要だということが理解できた($n=24$)”、“実際にCTGの判読を行うことで、判読の仕方・判読の大切さが理解できた($n=15$)”、“看護職の動き・役割が理解できた／看護の視点をもつことができた($n=10$)”といった肯定的な意見が得られた。一方で、“想像の範囲を越えない／もっとリアルなシーンを見たい／違ったアングルから児娩出や胎児付属物の娩出の様子を知りたい($n=4$)”といった使用した視覚教材の内容に対する意見や、“映像では伝わりきらないその場の雰囲気や産婦の息づかいや表情など、実際の場でしか分からない雰囲気もあると思う($n=3$)”といった学内実習の限界を指摘する意見も得られた(表4)。

4. 受け持ち実習

1) 学内における受け持ち実習

学内における受け持ち実習の有用性について、「非常に学びを深める手助けになった」と回答した者は38名(74.5%)、「学びを深める

表4 分娩実習の有用性に対する意見(複数回答)

理由	n
分娩の様子・流れのイメージがついた	25
産痛緩和を実際に体験したことにより、対象に合った力加減や、触れ方を考えることが必要だということが理解できた	24
実際にCTGの判読を行うことで、判読の仕方・判読の大切さが理解できた	15
看護職の動き・役割が理解できた／看護の視点をもつことができた	10
DVDの場面毎に教員の解説があったため、ゆっくり丁寧に学ことができ、間違った情報のままDVDを見続けることがなく良かった／教員の解説により知識不足の部分やケア時の工夫点が明確になった	8
分娩室の雰囲気や安全・安楽を確保するための環境づくりの大切さを理解できた	5
産痛緩和は生理痛等にも応用できることが分かった	2
産婦の苦痛・辛さを知ることができた	2
実際の分娩台やアクティブチェアなどの器具を知ることができた	1
復習しようと思うきっかけとなった	1
母性領域ならではの魅力を感じた	1
子が尊いものだということが実感できた	1
産婦のつらさや児に会えた際の喜びを感じることができ、褥婦と関わる際に自然にねぎらいの気持ちが表出した	1
想像の範囲を越えない／もっとリアルなシーンを見たい／違ったアングルから児娩出や胎児付属物の娩出の様子を知りたい	4
映像では伝わりきらないその場の雰囲気や産婦の息づかいや表情など、実際の場合でしか分からない雰囲気もあると思う	3

手助けになった」と回答した者は13名(25.5%)であった(図1)。なお、「どちらともいえない」「学びを深める手助けにならなかった」「全く学びを深める手助けにならなかった」と回答した者はいなかった。

学内における受け持ち実習の有用性に対しては、“ペーパーペーシエントやビデオ学習ではなく、実際にカルテから情報を得たり、指導者役の教員と行動計画のやり取りをしたり、出産経験のある教員によるリアルな模擬褥婦と関わることで、実際の臨地実習に近い感覚を得ることができた($n=15$)”、“他学生や教員からフィードバックを受けることで、自分の癖や言葉遣い、無意識の行動等を客観視することができ、自己の課題を改善する機会となり、翌日の実践に活かすことができた($n=13$)”といった肯定的な意見が得られた。一方で、“看護計画の実施までシミュレーションで行えると、より学びが深まると思った($n=1$)”といった指摘も得られた(表5)。

2) 臨地における受け持ち実習

臨地における受け持ち実習の有用性について、「非常に学びを深める手助けになった」と回答した者は14名(82.4%)、「学びを深める手助けになった」と回答した者は3名(17.6%)であった(図1)。なお、「どちらともいえない」「学びを深める手助けにならなかった」「全く学びを深める手助けにならなかった」と回答した者はいなかった。

臨地における受け持ち実習の有用性に対しては、“褥婦や新生児の実際の経過や変化を五感で感じ取ることができた($n=7$)”、“助産師や産科病棟の雰囲気を知ることができた($n=4$)”、“母子のつながり(母子相互作用)や愛着形成というものを実感できた($n=4$)”といった肯定的な意見が得られた。また、“母性看護に興味を持つきっかけとなり、今後の将来を考える上で非常に手助けになった($n=2$)”といった進路決定の一助になったという意見も得られた。一方で、“実習期間が

表5 学内における受け持ち実習の有用性に対する意見(複数回答)

理由	n
ペーパーベースやビデオ学習ではなく、実際にカルテから情報を得たり、指導者役の教員と行動計画のやり取りをしたり、出産経験のある教員によるリアルな模擬褥婦と関わることで、実際の臨地実習に近い感覚を得ることができた	15
他学生や教員からフィードバックを受けることで、自分の癖や言葉遣い、無意識の行動等を客観視することができ、自己の課題を改善する機会となり、翌日の実践に活かすことができた	13
褥婦との関わり方、褥婦に合った聞き方や言葉遣い、タイミング、専門用語を使わずにどう説明するのかということ等を学ぶことができた	9
学生にとって分かりやすい事例だけでなく、複数事例あったことで、実際にどのような褥婦がいるのかを知るとともに、個性のある関わり的重要性を学んだ	5
褥婦と新生児という2人の対象からどのような情報を得て何を判断するのか、褥婦と新生児のつながりを考えて関わっていくことの大切さを理解できた	4
褥婦の設定やカルテ情報が詳細であり、模擬褥婦であっても考えることが多くあり、シミュレーションだからと妥協することがなく、緊張感・責任をもって関わる事ができた	4
1日だけで終わらず、2日間連続して同じ対象を受け持ちすることにより、対象がよりイメージでき、個々のニーズに合った支援の必要性を理解し、継続看護の大切さを実感した	3
他学生の関わりを客観的に見ることで、自分の関わり方の参考となる学びが得られた	3
ペア受け持ちであったが、最初にペアと内容を確認する時間があり、正しい情報を確認しながら行うことができた	2
観察をする際の注意点を理解することができた	2
表情や言葉からも情報を得ることができ、褥婦がどんな人なのか、褥婦がどんな気持ちを抱いているのかを想像することができた	2
S情報だけでなくO情報も大切なことを理解できた	1
対象の背景や気持ちにも目を向ける必要性を理解できた	1
会話だけで情報を取ろうとせず、五感を使うことの大切さを学ぶことができた	1
環境を整えることの大切さを理解することができた	1
看護計画の実施までシミュレーションで行えると、より学びが深まると思った	1

表6 臨地における受け持ち実習の有用性に対する意見(複数回答)

理由	n
褥婦や新生児の実際の経過や変化を五感で感じ取ることができた	7
助産師や産科病棟の雰囲気を知ることができた	4
母子のつながり(母子相互作用)や愛着形成というものを実感できた	4
看護師の介入の見学により、褥婦との関わり方や今後の育児を支援していく関わり方のイメージができた	3
母性看護に興味を持つきっかけとなり、今後の将来を考える上で非常に手助けになった	2
人形とは違い、実際の新生児の観察の難しさを学ぶことができた	2
褥婦との関わりの中で褥婦が抱える悩みや不安といった心理面を知ることができた	2
実際に母子と関わったことで、妊娠期から産褥期をつなげて捉えやすかった	2
実習期間があと2日間長ければ、より実習での学びが深まった	1

あと2日間長ければ、より実習での学びが深まった(n=1)”といった感染対策に伴う実習日数制限を指摘する意見も得られた(表6)。

3) 学内実習と臨地実習の比較

受け持ち実習の有用性について、学内実習

群と臨地実習群の回答を得点化し、比較した結果、学内実習となった学生の得点は4.75±0.44点、臨地実習となった学生の得点は4.82±0.39点であり、両群において有意差は示されなかった(p=0.512)。

5. 実習満足度

全対象の実習満足度の平均は 4.41 ± 0.64 点であった(MAX5.0点)。また、学内実習のみとなった学生の実習満足度の平均は 4.39 ± 0.60 点、2日間の臨地実習が行えた学生の実習満足度の平均は 4.46 ± 0.62 点であり、両群において満足度の有意差は示されなかった($p = 0.610$)。

V. 代替実習内容の有用性および今後の課題

1. 代替実習内容の有用性

本代替実習内容は、COVID-19感染拡大により多くの制限がかかる状況下においても、①学生の学びを深める手助けとなること、②臨地実習に近い学びができることを目指し再立案したものである。すべての実習内容において、95%以上の学生が“学びを深める手助けとなった”と回答しており、一定の成果が得られたと考える。また、自由記述内容の中では、“模擬カルテからの情報収集”や“妊娠・出産経験のある教員による模擬妊婦および模擬褥婦”、“助産師としての臨床経験のある教員による模擬助産師および模擬臨床指導者”に対する肯定的な意見が得られ、加えて、受け持ち実習の学内実習群と臨地実習群の有用性得点に有意差がないという結果が得られた。日高(2020)は、リアリティのある実習環境の設定として、臨床指導者との連携や高性能シミュレーターの活用が効果的との報告をしている。本代替実習においては、実習施設の臨床指導者への来学の依頼や高性能シミュレーターの使用は実現しなかったが、担当教員の工夫により、臨地実習に近い実習環境を提供することができたのではないかと考える。

加えて、実習満足度が4.41点(MAX5.0点)と高得点であること、学内実習のみとなった学生と2日間の臨地実習が行えた学生の両群において実習満足度に有意差が示されなかつ

たことから、制限のある状況下においても、可能な限りの実習環境を提供できたのではないかと考える。

2. 今後の課題

学内における外来実習や受け持ち実習は、模擬妊婦・模擬褥婦を用いながらの実習を実施した。一方、分娩実習においては、担当教員数の不足等により、模擬産婦を用いての実習を実施することはできず、DVD視聴による分娩のイメージ化および教員の解説による分娩期の看護に関する知識の再確認を行う実習内容となった。しかしながら、学生より、分娩実習におけるリアリティの欠如に関する指摘が複数挙げられていることを考慮すると、改善の余地があると考え。石川、内田、一花(2020)は、分娩期の看護の演習にシミュレーション教育を導入したことにより、産婦とその家族に対する看護のイメージ化の促進や看護の実際を深めるための機会になったことを報告している。本学においても、分娩期の看護に関する学内演習または学内実習へのシミュレーション教育の導入等を検討し、リアリティのある学修環境を提供する必要があると考える。

加えて、全国的な分娩件数の減少に伴い、今後、本学においても母性看護学実習の実習施設確保が困難となることが予測され、臨地実習における経験内容の制約や臨地実習日数の短縮が生じ、母性看護の対象理解やイメージ化が困難となる可能性がある。今回、シミュレーションや模擬妊婦・模擬褥婦を用いた学内実習の有用性が示されたことから、これらの内容を学内実習として臨地実習開始前に導入することにより、母性看護の対象理解やイメージ化が図られ、貴重な経験の機会となる臨地実習へのスムーズな移行につながると考える。

謝辞

アンケート調査にご協力頂きました本学の学生の皆様に感謝致します。

なお、本稿において開示すべき利益相反事項はない。

文献

日高艶子(2020). オンラインツール・オンデマンド教材を組み合わせた実習方法とリアリティを追求したシナリオ・シミュレーション. 看護展望, 45(13), 1199-1203.

石川裕貴, 内田貴峰, 一花詩子(2020). 「産婦の看護」にシミュレーション教育を取り入れた学習方法の検討. 埼玉医科大学短期大学紀要, 31, 23-34.

内閣官房(2020). 新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言, 2021/06/05, https://corona.go.jp/news/pdf/kinkyujitai_sengen_0407.pdf

pdf

新型コロナウイルス感染症長野県対策本部(2020). 上田圏域に「新型コロナウイルス特別警報」を発出します, 2021/06/05, <https://www.pref.nagano.lg.jp/hoken-shippei/kenko/kenko/kansensho/joho/documents/uedalv4.pdf>

新型コロナウイルス感染症長野県対策本部(2021a). 佐久圏域に「新型コロナウイルス特別警報」を発出します, 2021/06/05, https://www.pref.nagano.lg.jp/hoken-shippei/kenko/kenko/kansensho/joho/documents/0103kansenskeikailv_2.pdf

新型コロナウイルス感染症長野県対策本部(2021b). 全県に「医療非常事態宣言」を発出します, 2021/06/05, https://www.pref.nagano.lg.jp/hoken-shippei/kenko/kenko/kansensho/joho/documents/0114iryohijyokitaisengen_1.pdf